

## 平山清次博士を悼む

On the late Prof. K. Hirayama.

山本 一 清 *Issei Yamamoto.*

去る四月8日に平山清次博士が亡くなられた由を、其の2~3日後、旅中に聞いて、自分は驚ろき、且つ落膽した。それはちやうど昨年末から、改曆問題について、自分は同氏と論戦してゐたので、殊に此の論戦は、何れが勝ちか負けか、世間に發表して、識者の判断を待つことにしよう、約束しつゝ、論を進めてゐたからであつた。近年同氏が病氣勝ちであることは、直接間接に聞いてゐたが、急逝せられたのは意外で、驚きもし、又、論争の相手が無くなつたので、一入の淋しさを感じた。

氏は明治7年宮城縣に生れ、二高を経て、明治30年東京帝國大學天文學科を卒業され、以後、殆んど引き續いて東京天文臺の職員であり、大正8年に教授となり、昭和10年退官された。又、大正14年以來は帝國學士院會員であつた。

氏は、もともと寺尾壽博士の高弟であつて、數理天文學——殊に天體力學の專攻者であつたが、しかし若い頃から麻布の天文臺でいろいろな方面の仕事をせられたらしく、明治34年には南洋スマトラ島(パダン市)の皆既日蝕觀測隊の一員として出張され、又、麻布では徑7センチの天頂儀を以つて緯度變化の觀測されたこともあり、明治39~40年には日露國境確定のため樺太へ出張された。これ等の實地觀測に關連して、明治40年には246ケの恒星の赤緯と固有運動のカタログを發表し、又、明治40~42年頃には、國際緯度觀測の結果に關する統計的な研究文をナハリヒテン誌上に2~3回發表された。それから、明治43年にハリ彗星が歸來したのに因んで同星の日本記録を調査されたり、日蝕や獅子座流星の東洋の古記録を調査されたりしたこともあるが、しかし此等は言はゞ餘暇の仕事であつて、當時の同氏の本職は大神宮の曆を計算作製されることであつた。そして、これに關聯して、古今東西の曆學を可なり廣く研究され、支那曆とギリシヤ曆の問題や、日本の時刻法、各地の日月出入計算法等を發表され、又、改曆問題については、明治以來、晩年に至るまで關心を有つてゐられた。

上述の如く多方面の雜然たる研究題目から劃然として唯一の問題に没頭されたのは、大正5年に米國へ遊學され、イェール大學のブラウン教授の下に於いて小遊星の研究を始められて以來のことである。周知の如く、ブラウン氏は“月の運動理論”の世界最高の權威者であつたが、同氏の示唆により、平山氏は小遊星の秤動問題を研究し、大正7年歸朝後も永く此の問題の研究を續け、遂に小遊星の“族”を多く發見された。此等の研究に關する氏の論文は大正6年頃

から昭和12年頃まで、東京帝大理科紀要、數學物理學會記事、天文輯報、學士院記事等に發表され、これ等が氏の一生涯の最も輝やかなしい部分を占めてゐる。従つて、氏と小遊星とは深い宿縁につながれ、“天界”にも1~2回寄稿され、又、ベルリンの計算局のために年々の小遊星の位置推算を助力せられた。

氏の生存中、即ち最近6~70年にわたつて、學界は新舊天文學の交錯甚だしい時代であつたが、氏はどこまでも寺尾學のイデオロギを固守し、華々しい天體物理學には手を出さなかつた。只、しかし、昭和6~7年の頃、週期變星の問題について、純力學的な論理を進め、大した意氣込みを以つて、わざわざ京都まで其れを説きに來られたことがあつたが、この論は其の後振はなかつた。

氏は熱心なクリスチャンで、マジメな性格の持ち主であり、いかにも狭い意味の學者的な、常識を逸した傾向も時々表はれたが、しかし、表裏の無い、極めて純眞な性格は、東京には珍らしい型の人であつた。かのメートル法に反對して、尺貫法を主張したり、夏時法を主唱したりして、他人の説を聴かうとしない偏喬さは著しかつた。氏がメートル法に反對したるがため、我が國內の理學文化の發達をどれだけ妨げたかは、測り知れないものがある。

自分と氏とは可なり永い間の交際であるが、出身校が違ふので、別に師弟の間がらでも何でもなく、唯の同學の友として、いろんな場合に、いろんな議論をした。従つて、東京在の人々が直接に知らない氏の逸話は、自分は澤山知つてゐる。一日、氏と自分は、“學閥”の功罪について大に論じ合つたことがあつた。その時、氏は學閥を肯定するが如き口吻を漏らしたので、自分は甚だしく其れを詰つたことがあつた。氏は、又、未だ壯年の頃、“數學公式を忘れて困る”と言つて、研究の樂屋話を漏らされたこともあつた。しかし、晩年の頃、改曆問題でよほど氏は調子に乗つて居られたらしい所へ、自分は鋭く其の急所を突いたので、頗る狼狽したものと見え、(それに、老人性の短氣も手傳つて)最近には極めて興奮した論調を以つて返事をよこして居られ、殊に、自分が、“曆は全世界劃一的のものでなければならぬ”といふ常論を持ち出すものだから氏はよほど窮したと見えて、“曆界は百花爛漫の盛觀が現はれても宜いではないか??”といふ返答をよこされたが、これなどは、氏の論の弱點を“語るに落ちた”ものであると言ふべきである。

とにかく、一徹な性格から、相手の老若をも顧みず、氏は、議論を吹きかけられた。又、氏は決して冷靜と言はるべき人でなく、時には頗る感情的な性格を表はされた。かの一戸直藏博士が死なれた時、平山氏が天文月報誌上に書かれた一文を讀むと、如何に氏が死した論敵に對して冷酷であるかが明瞭である。かういふ性格の人は、學者として人は許すかも知れないが、人として、又、教育者として、又、指導者として尊敬されない。氏の如き人は、官學者としてよりも、在野の學者であつた方が、もつと大きく學界のために貢獻したであらう。